みなかた

水無月（みなづき）　第676号

目次

古代祭場　7
イコモス勧告　7
五月祭・浜宮祭　6
神宮神宝より紐解く　5
神宝館だより・造営日記　4
宗像大社歌会詠草　4
御造営奉賛者御芳名　3・2

よって、第六十二回神宮式年遷宮が斎行され、四年が経過しようとしている。「遷宮」という言葉が広く国民に知られ、近年では「中今（なかいま）」や「常若（とこわか）」といった言葉も使われるようになった。「中今」とは過去・現在・未来の中の現在にあたる。祖先から歴史を受け継ぎ、現在の我々が今を精一杯生き、未来へと繋ぐ意味である。一方、「常若」とは常に若々しく清浄な状態の事をいう。これらは神道思想の柱である。宗教が多く存在する中で注目されるのはやはり日本が神道の国だからである。初詣や人生儀礼などで神社に参拝し、神に感謝をする事は先人達から受け継がれてきた歴史である。近年、パワースポット巡りや御朱印ブームなどで神社に参拝する方が増えている。お迎えする立場にある我々は常に神社の清浄さを保ち、氏子や崇敬者と共に未来へ歴史・文化・伝統を繋げていかなければいけない。（武）

辺津宮境内　高宮祭場

神奈備祭（10月3日）

月次祭（毎月1日・15日）

古代祭場

――磐境（いわさか）神籬（ひもろぎ）――

宗像大社には、神社に社殿が構築される以前の姿、磐座【沖津宮】、神籬【辺津宮】の祭場がある。岩や木々に神聖さや神秘性を見出す宗教は神道のみならず、かつては世界各地にも多く存在したが、今ではこのような古代祭場を維持しているのは国内においても珍しい。

神道は日本固有の宗教であると同時に、ケルトやネイティブアメリカンなどと共通する自然崇拝や自然をはじめとする万物にも神々が宿る古代原始宗教が根底にある。近年、地球環境問題が大きな課題となり、先住民などの価値観が見直されつつあるが、神道にはその根本が今も残されている。

神社に社殿が構築される過程には、仏教が強く影響しているとされている。そのため現代人には神社と寺との区別がつきにくいようである。しかし、宗像のような古代祭場と比較すると、神道と自然との関わりが明らかになる。

近年の地球環境問題は、産業革命以降、大量生産大量消費を繰り返し、経済発展という名のもとに自然を搾取し続けてきた結果といわれている。今日の異常気象などによる甚大な被害もその影響とされている。

自然は多くの恵みを育む一方で、時として荒れ狂う。古代の人々はこのような自然の摂理を熟知した上で、自然そのものに神々を見出し、畏怖畏敬の念で崇め、自然に対する抑止力を維持してきた。しかし、人類はここ200年間の短い時間の中で、そのバランスを壊してしまったのである。

神道のような民族宗教に内在する自然観は、今も人類のDNAに深く染み込んでいる。そのため国際社会においては、新たな価値観を見出すため、古代民族宗教などにあった自然観に目を向けようとしている。

神道の祭りは日本神話で神聖視された米の生育とともにあり、豊作のために自然の猛威にさらされない祈りが捧げられる。地域によっては雨風などの自然災害を鎮める祭りも執り行われる。近年、自然との共生などという言葉がよく使われるが、自然を熟知した民族は自然の驚異も忘れていない。自然そのものに神々が宿るという信仰は、人類のこれから進むべき道に、様々な示唆を与えるだろう。

沖ノ島　磐座

ユネスコ諮問機関 イコモス勧告を受けて

五月五日、イコモス(国際記念物遺跡会議)より『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群の世界文化遺産登録について、沖ノ島(岩礁含む)以外の四つの資産(辺津宮、中津宮、沖津宮遙拝所、福津市の新原・奴山古墳群)を除外した勧告が出された。沖ノ島の考古学的価値は評価され、三宮「信仰」の歴史は評価されなかった。

「古事記」「日本書紀」に明確に記述された宗像の歴史文化を一体の資産としてきた地元地域としては誠に残念なものであった。沖津宮、中津宮、辺津宮の三宮一体で紡いできた信仰を切り離すことはできない。当社はじめ地元では除外された資産も含めた登録を目指しており、五月十九日には福岡県知事、宗像・福津市長、葦津宮司が上京し菅官房長官、岸田外務大臣など日本国政府へ陳情を行った。

七月、ポーランドでの本会議まで、構成資産全てで登録されるように声を上げ続けたい。

五月祭・浜宮祭

恒例祭典として毎年、五月五日に行なわれる五月祭・浜宮祭について考察してみた。

古くはこの五月祭と放生会(現・秋季大祭)は年中最大の祭儀であった。正平年中行事(一三五〇年頃の祭事表)には五月会とあり、御神興(おみこし)が出て賑わう盛大なものであったことから、みあれ祭(昭和三十七年再興)に続き昭和三十八年に再興されている。

場所の変遷を見ると、当初は辺津宮付近の浜辺で行なわれ、釣川の変遷に伴い、江口の五月松原(現・五月宮)に移行している。現在の浜宮は、「濱降り修祓(しゅばつ)」おはらいをする場所であったことが記録されている。

昭和三十八年の再興の記事には、『当社が宗像郡(現在の宗像市・福津市)の総社であることから、郡内神社の多数の参加を得て、それぞれの氏神の神籬と紅白の幟を捧げ、五月祭と濱降り修祓の行事を併せ、先づ神湊の浜宮で、次いで江口の五月宮で行なった』とある。

みあれ祭が宗像七浦の漁民により再興された祭りであるのに対し、五月祭は宗像内陸の郡民の要望により再興されており、海と山、宗像地域の共同性を象徴する神事である。

❶神湊、田島の氏子が参列する現在の五月祭
❷五月宮　社殿はなく木を依代とする神籬祭場
❸浜宮　古くは木皮社と言われ、現在は石の祠がある

神宝館だより 3
八万点ノ国宝収蔵

――黒曜石から縄文時代の沖ノ島を探る――

昨年度より県・市と伴に当社所蔵資料の調査を開始し、沖ノ島より出土した縄文時代の石器の分析結果を得た。

沖ノ島では、4世紀後半から行われた国家祭祀の遺跡が世界遺産の構成資産の要となる一方で、縄文時代に、島で人が一時的に活動していた痕跡も確認されている。島の波止場を少し登った旧社務所前遺跡などからは、縄文・弥生時代の土器や、縄文時代の石鏃・石匙・尖頭器などの石器が出土しており、これらは縄文人、弥生人が宗像を含む九州本土から玄界灘を越えて島へ持ち込んだものと解されている。

分析は石器にふれずに蛍光X線を照射して産地を特定する「蛍光X線分析」を採用し、縄文時代の黒曜石の石器を対象とした。黒曜石は色調で産地推定ができ、黒い石の産地は有名な佐賀県伊万里市腰岳産や、長崎県佐世保市針尾島や平尾市度島産が知られ、乳白色の石の産地は大分県姫島産とされる。事前の熟覧調査で沖ノ島出土の黒曜石の色調は前述の色味と同じものと外れるものがあった。

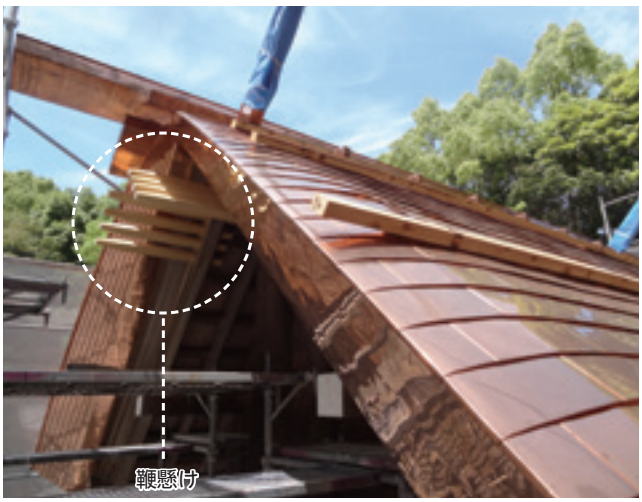
結果は、腰岳系の石が約5割、姫島系が約2割、続いて長崎県壱岐市印通寺系の数が多く、ほかに佐世保市域もまとまってあった（点数の少ない産地は省略）。産地は広大な範囲に及び、特に壱岐産の石の存在は特徴を示す。ここに、黒曜石を通した人の動き（交流）の一端がみえてきた。今後、宗像沿岸部の鐘崎貝塚や山鹿貝塚の出土品や、壱岐、佐世保などの西側地域の遺跡との比較を行い、人の動きや石材の流通の復元につなげたい。（福）

沖ノ島出土 石鏃、石匙、尖頭器

時満ちて道ひらく 造営日記 33

第二宮・第三宮修復工事

三月に着工した修復工事は社殿の銅板葺きが完了し、堅魚木が装い新たに取り付けられ、錺金具も新調された。また、棟持ち柱の根継ぎや神宮古材を加工して造られた鞭懸け（八本）の取り替えが行われた。



第670回　宗像大社歌会詠草

■大西晶子選　■毎月25日〆切

日ごと増す淡き黄色の花多に木香バラのしなり見上ぐる　山本　静子
憧れのバラのアーチ。〈淡き黄の花が日ごとに増えゆける木香バラのしなる枝見あぐ〉。

魅せらるる弥勒菩薩の指と頬刹那の扉異次元の口　早川　祥三
表現したいことが多い作者。〈指と頬触るる刹那のお姿にわれは魅せらる弥勒菩薩像〉。

木の芽ふく裏参道の上り坂うぐひす鳴けり幼く鳴けり　佐々木和彦
季節感に溢れた歌。鳴くの重複は一つにし、結句はやや平凡だが〈幼き声に〉としては。

旧暦の睦月七日なりあつあつと蕪汁（かぶらじる）あり七草とせず　山﨑　公俊
美味しそうな景がうかぶ。二句以下〈～七日にあつあつの七草ならぬ蕪汁（かぶらじる）食ぶ（飲む）〉。

米寿にあと百日で往生す祝約束守れず悲し　秋吉　嘉範
逝かれたのはどなただろう。仮に母とし（～まであと～で母逝きぬ祝う約束～）などと。

うららかな日和となりてあるなしの風に誘はれ庭桜舞ふ　大和美由紀
二句がやや説明的なので〈あるなしの風に誘はれ庭の桜花びら散らすうららかな日に〉。

風感じ建具は軋む安穏にわが五十年を暮しぬ家は　北野カズミ
住む家にも時は流れる。〈風あれば建具は軋む安穏に五十年ほど暮ししわが家〉とした。

赤信号の車の例に桜花幸せですかひらひら舞ひ降る　森　龍子
花びらに感情を見た作者。〈信号で停まる車の列に降る「しあわせですか」と桜の花弁〉。

荒ぶれる男の悪しき息のごと杉は花粉を思いきり吹く　吉崎美沙子
上の句の比喩がスギ花粉の飛び方の激しさを表しほのかなユーモアをも感じさせる。

薄紅の屏風立てたるごとく咲く犬鳴川の岸辺の桜　萩原　勉
河の岸辺に切れ目なく咲く桜に目をとめた作者。固有名詞が効いている。

主（あるじ）なき家の花壇に春の花風と車に揺られて咲けり　本田エリナ
空き家と知って見ると庭の花も寂しい。具体的な春の花の名があると更に良い歌になる。

◆選者詠

夕餉にと青紫蘇摘みに出でて来て小さきバッタの跳梁をみる
呼び出し音七回鳴りぬ大阪の脚病む友が受話器とるまで

第643回　俳句

道沿いに轉る目白群ふたつ　はやと

御造営奉賛者御芳名

（平成二十九年四月）
（順不同・敬称略）

三〇、〇〇〇円
北九州市　中元　正剛

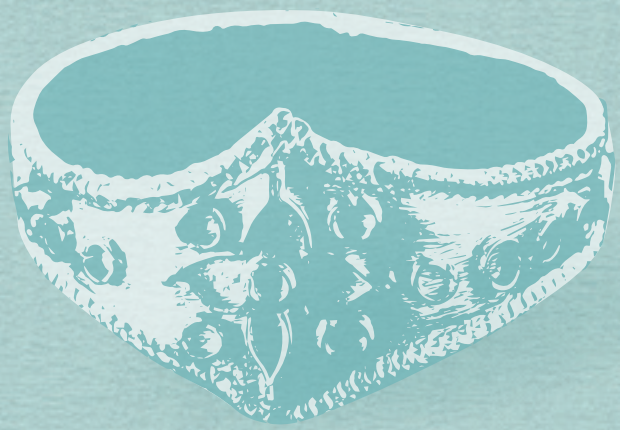
一〇、〇〇〇円
宗像市　真鍋　卓見
横浜市　並木　智宏
横浜市　野元　満

五、〇〇〇円
明石市　橋本　潤
茨木市　中芝　晶子
印旛郡　矢吹　忠久
春日部市　遠藤　忠宏
北九州市　佐藤　千春
北九州市　大辻　智子
古河市　茂呂　貞美
築上郡　吉川　秀樹
中央区　瀬田　直美
西宮市　平川久美子
比企郡　髙野　春雄
姫路市　羽野由美子
姫路市　神谷　龍慶
枚方市　岡田　豊一
福岡市　長田　秀樹
福岡市　藤原　直樹
福岡市　高木　勝次
福山市　谷本　倫朗
宗像市　岩佐　稔
横浜市　並木　智宏

三、〇〇〇円
大阪市　福地　昭義
堺市　小林　良美
札幌市　高橋　博音
関市　横山　昌彦
都希子

二、〇〇〇円
大分市　中島　達明
唐津市　溝上さわ子
川崎市　宗像　一嘉
京都市　竹内　力
古賀市　木原　壽洋
古賀市　北神　裕三
富里市　吉田　明生
福岡市　山口　正高
福岡市　永嶺　大介
松山市　吉川　慶太
宗像市　井村　憲昭
宗像市　井上　強

むなかた
水無月（みなづき） 第676号
2017年6月1日発行（月刊）／宗像大社 〒811－3505 福岡県宗像市田島2331 電話（0940）62－1311（代） http://www.munakata-taisha.or.jp/



6月 まつりごよみ

1日	総社月次祭 引続き 高宮祭、 宗像護国神社祭	午前11時
15日	総社月次祭 引続き 高宮祭	午前11時

編集後記

「一期一会」一生に一度の出会いを大切にしなさいという意味の四字熟語▼五月は神社界でも総会が多い月です。また当社では出光興産、トヨタプロダクションエンジニアリングの社員研修を受け入れ。そしてイコモス勧告時のマスコミ対応等、今月は業種を問わず多くの人と会いました▼特に研修の受入では、ディベートの時間もあり鋭い質問を受け、返答に詰まってしまうこともありました。まだまだ未熟である自分に気付き、研修の受け入れでは自分自身も勉強させられました▼このように他業種との交流によって得られるものは自分にとって大きな糧になると感じ、人との出会いは業種を問わず大切にしないといけないと感じさせられた一ヶ月でした。（黒）

宗像大社